

ダンボールによる造形活動の実践からみた 5歳児の表現過程についての考察

渡 邊 詩 子*

Expression Processes of 5-year-olds using Modeling with Corrugated Cardboard

Utako Watanabe*

キーワード

表現、遊び、造形活動、ワークショップ、ダンボール

I はじめに

現在、本学では独自の取り組みとして、学生と高校生がともに参加する高大連携の一般的な活動に、幼稚園児を加えた三者協定の事業¹⁾が行なわれている。これは、幼稚園の園児たちに、高校生、短期大学生、教員という世代の違う人たちが、“ふれあう保育・教育”を展開することで、成長し合うことを目的としたものである。

また本事業の幼児保育学科主催の造形活動ワークショップは、幼稚園児にとって、ダンボールに加えてカラークラフトテープなど、吟味された豊富な素材が十分に用意されているという良好な環境のなか、異なる幅広い世代の人たちと関わりながら、造形活動をおこなうという得難い経験であると言えよう。

本稿では、その経緯、造形活動ワークショップの内容を紹介するとともに、ダンボールによる造形活動における5歳児の表現過程について観察をおこない、観察された結果について考察し、特徴をとらえる。

今回は人的環境および素材の両面において十分な条件のもとにおこなったが、今後、それらの環境に至らない状況下においても同様の内容のワークショップを試みる予定である。そしてその結果、同様の子どもたちの行為が観られたなら、今回導き出された特徴が環境の規模に左右されない造形活動のプログラムの作成に活かすことができると考えている。

さらに一連のワークショップをとおして、素材の適正な量を導き、造形遊びで一般的に言われている「準備の大変さ」に含まれる「素材の量」についても、問題の解決に結びつく基礎的知見を得て、今後の教育的なワークショッププログラムの開発、作成に活かしていきたい。

*わたなべ うたこ：大阪国際大学短期大学部講師〈2019.12.5受理〉

なお先行研究としては、ダンボール遊びについて報告・論述したものはみられるが²⁾ 素材(教材)であるダンボールの数、サポート参加者の人数規模が異なる。本報告では、素材量、参加人数ともに規模が大きく、十分な条件から導き出された行為について考察しているところに独自性があると考えている。

Ⅱ 実践概要

1 三者協定造形活動ワークショップ

三者協定造形活動ワークショップには、大阪国際大和田幼稚園の園児71名、大阪国際大和田幼稚園の幼稚園教諭7名、大阪国際滝井高等学校普通科幼児保育進学コースの高校生38名、標準コースの高校生2名、大阪国際滝井高等学校教員1名、外部高校生7名、大阪国際大学短期大学部幼児保育学科の1年次生8名、2年次生4名(以下学生と称す)、大阪国際大学短期大学部幼児保育学科のこども園・地域連携検討委員の教員4名(以下教員と称す)、大阪国際大学職員5名の合計145名が参加した。園児の年齢については、大阪国際大和田幼稚園教諭との事前打合せにおいて、クラフトテープを手で切ることが出来、ダンボールをダンボールカッターで切ることが可能な年齢を考え、5歳児とした。

本ワークショップの前に、高大連携授業として高校生に向け、「身近な素材による表現活動-ダンボール-」という事前授業を、2週間前の6月1日に行った。この授業では、6月15日の園児との活動に入る前に、ダンボールに触れ、制作を通しダンボールの特徴や材料用具について学び、より深い知識や経験を得た上で、園児と触れ合うことを目的とした。また、ダンボールカッターは扱い方を間違えると危険が伴う道具であるため、本ワークショップへの準備として、事前にダンボールカッターを園の先生に10本預け、遊びの時間にダンボールカッターを使い扱い方の練習をしていただいた。学生には事前授業において、園児がダンボールカッターを使用する様子を撮影した映像を見せ、援助の仕方を指導した。

本ワークショップの実施概要は表1のとおりである。

ワークショップ「ダンボールであそぼう」は、進行表2に沿って活動を行った。ここでは、園児、高校生(大阪国際滝井高等学校普通科幼児保育進学コースおよび標準コースの3年生)、学生の様子について紹介する。

造形活動ワークショップ当日、園児が体育館に到着すると学生と教員は入り口に並んで園児を迎え、園児が指定の場所に着席した後、筆者である渡邊と学生が園児達の前方に並び、園児が親しめるように簡単な自己紹介を行った(図1)。

大阪国際大和田幼稚園教諭との事前打合せの際、園でのダンボールを使用した活動について、普段は10枚から20枚ほどで活動していることを伺った。今回のように600枚用意してあることは、園児にとって初めての経験となる為、「沢山のダンボールがあること」や「全部使うことが出来る」などを伝えた上で、園児が楽しい気持ちを持ち活動に入れるようにした。次に用意してあるカラークラフトテープの色について、園児が理解しやすいように1色ずつ紹介し、用意していたダンボールカッターについては専用のスペースがあることを伝えた。活動への導入として「ダンボールでどんなことができるかな」と園児に尋

ダンボールによる造形活動の実践からみた5歳児の表現過程についての考察

表1 三者協定造形活動ワークショップ実施概要

名称：「ダンボールであそぼう」※「ダンボールで街を作ろう」から変更
実地日時：令和元年6月15日(土)9：00～12：10
会場：大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部 体育館
参加人数：145名(園児71名、幼稚園教諭7名、高校生38名、高校教員1名、外部高校生7名、短期大学部幼児保育学科1年次生8名、2年次生4名、短期大学部幼児保育学科教員4名、職員5名)
目的：園児たちに、高校生、学生、教員、という世代の違う人たちがふれあい、効果的に教育を実施していく。
企画立案：渡邊詩子
材料：ダンボール800枚(当日600枚、事前授業200枚)、カラークラフトテープ(各10個、緑、黄緑、黄、レモンイエロー、紫、ピンク、青、水色)、カラー布テープ(各3個、黄緑、黄色、レモンイエロー、紫、赤、ピンク、水色)、ダンボールカッター(20本)
内容：園児がダンボールを使用し造形活動をする。高校生と短期大学生は、園児の活動を援助しながら保育を体験し学ぶ。
その他：高校生には事前授業として高大連携の時間にて、200枚のダンボールを使用し、造形活動を行う。ワークショップの後、高校生には渡邊が作成したレポート及びアンケートを実施した。幼稚園教諭には後日、園児の様子について意見を聞くためのアンケートを実施した。学生にはワークショップについてのアンケートを実施した。
準備：園や教職員との打ち合わせを数回行う。短期大学生への事前説明会を行う。それらをまとめて進行表2や会場のレイアウト(図1)を作成した。

表2 進行表—当日の渡邊の動きと園児、高校生、学生の動き

時間	渡邊	滝井高校の高校生・短期大学部幼児保育学科の学生	大和田幼稚園の園児
9:00	流れを高校生に説明する	高校生は体育館へ集合する・着替え、全体の流れを確認する 体育館にて「場」のセッティングをする	
9:10	流れを短期大学生に説明する	短期大学生は体育館へ集合する・全体の流れを確認する 高校生が迅速に「場」をセッティングできるように声をかける	
9:50	体育館の入り口で園児を迎える	高校生、短期大学生が入り口で園児を迎える	園児と先生が体育館へ来る 園児が指定の場所に座る
① 造形活動ワークショップ			
10:00	園児に今日することや材料用具について説明をする	高校生は園児の後方で説明を聞く 短期大学生は前に並び、説明の補助をする	説明を聞く
10:10	園児の制作の面白い部分を紹介する(制作を止めないように)	高校生は園児の制作の援助(見守る)をする 短期大学生は指定の場所で、園児の制作の援助(見守る)をする	造形制作開始 自由に行動する
10:40	全体に写真撮影の声をかける(体育館2階から撮影する)	園児に写真撮影の声をかける	写真に写る
10:50	遊び終了の合図をする	園児に遊びを終えるよう声をかける	遊びを終え、指定の場所に座る
11:00	園に持ち帰る作品について先生と相談する・園児を見送る	園児を見送る 園に持ち帰る作品を体育館の端に移動させる	園児・先生は園へ戻る
② 高校生への振り返り			
11:05	高校生へ振り返り開始の声をかける	高大連携授業で組んだグループごとに座る	園長先生からの感想と指導
11:10	渡邊が作成したレポートを配布する 6/1日の高大連携授業も含む	レポートに振り返りを記入する	
11:20	短期大学部幼児保育学科の教員が高校生からの質問に答える	質問タイム レポートをもとに質問する	
11:40	振り返り終了の声をかける	レポートを完成する(後日提出する)	
③ 撤去作業			
11:45	片付けと掃除の声をかける	作品の一部は幼稚園へ持っていく ダンボールを舞台側のドアから外へ運ぶ モップで掃除する	
12:05	全てのプログラム終了の挨拶をする	高校生は解散 短期大学生はダンボールを業者に引き渡す手伝いをして解散する	

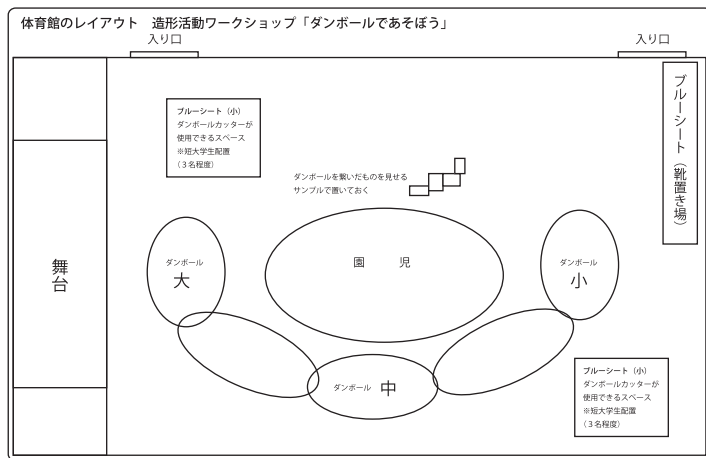


図1 会場レイアウト



図2 材料用具の説明

ね、広げてあるダンボールを数枚、カラークラフトテープでつないで見せたり、箱型のダンボールを積んだりつないだりして見せた(図2)。

活動開始の合図と共に、園児達は周囲に置かれたダンボールを取りに行った。園児はダンボールを取ると、自分が活動しやすい場所まで運んでいき造形活動を始めた。学生は主にダンボールカッターの専用スペースにて待機した。高校生は学生が前方で説明している間、園児の後方で待機しており、活動が始まると、園児1人もしくは2人の活動に寄り添った。園児の集中力を途切れさせないように、高校生や学生には活動中の注意点として「園児が夢中になっている行為や活動を止めないこと」と、「必要な時のみサポートすること」を事前授業と当日ワークショップ開始前に再度伝えた。

中坪史典らの研究によると「夢中度」については、活動に対して子どもが没頭し、心を奪われ、全能力が向けられ、最大限の力を発揮しようとする状態のことであり、そこで子どもの集中力は最高に達する³⁾とある。本ワークショップにおいても、その状態がみられ、園児が体よりも大きなダンボールを運ぶ時や、クラフトテープを切るとき、またダンボールを立てて園児がクラフトテープを貼る時など、主に園児の方から高校生や学生に声をかけ、高校生と学生がサポートするという様子が多く見られた。これらの行動をみると、園児が主体的に活動に取り組んでいることがわかる。進行計画を作成する際、園児の集中が途切れた場合の案も考えていたが、当日は予定していた活動時間の40分では時間が足りず活動時間が少し伸びた。園児たちはつなげたり、貼ったりする行為を楽しみ、活動に没頭し取り組んでいた。これは前述の文献3による「夢中」に当てはまると考えられる。

活動時間終了の5分ほど前に園児に声をかけ、全体写真を体育館の2階から撮影した。このワークショップにおいて、写真撮影は活動の終わりを告げる前段階と位置付けており、これは園児にとってわけがわからないまま活動が終わることのないようにする為であ

る。写真撮影の後、数分活動を続け、大きな声で渡邊が終わりの合図を告げた。その際、多くの園児たちから「もっと（活動を）やりたい」との声があがった。園児たちに、制作物の一部を園のホールに運ぶ約束をすると、園児たちは納得し活動を終えることが出来た。園児たちは高校生や学生に、園に持ち帰る部分を伝え、活動の最初に着席した場所に集まった。作ったものをみんなで鑑賞した後、全員で終わりの挨拶をしてワークショップは終了した。

2 事前授業およびワークショップ後の振り返りより

園児を見送った後は高校生に向けて、活動の振り返りが行われた。園長先生から本日の活動に関する感想や保育に関するお話があり、その後渡邊が作成したレポートを記入してもらった。レポートをもとに、幼児保育学科の教員に高校生から質問があり教員が答えていった。高校生からは、“園児と話をする際、園児の声が小さくて聞き取れない場合はもう一度聞いても良いのか”など、園児とのコミュニケーションに関する質問があった。教員からは、“聞き取れなかった場合は子どもとの会話が成立しないので、ごめんね、と謝り、もう1回言ってくれるかな、と再度聞くと良い”などの回答があった。レポートを提出したのち、6月1日の「事前授業」6月15日の「ワークショップ」「活動の振り返り」と全てのプログラムを終了した。

レポートでの“6月1日の授業でのダンボール制作の体験は、イベントでのダンボール遊びにどのようにいかされたと思いますか。”という問いには“自分達がやって（制作して）むずかしかった所を優しく補助してあげることが出来た”“自分達が先にダンボールの性質に触れていたことで、子どもたちにアドバイスという援助を行うことが出来た”などの回答があり、事前授業での体験が生かされていることがわかった。

活動全体については“子どもと一緒に遊んだり、作ったりしてみないとわからないことなので、この体験や経験が自分のためになった”“このイベントで自分自身も多くの事を学べたのでよかった”などの感想があり、三者協定造形活動ワークショップが高校生にとって、深い学びに繋がったと言える。

幼児保育学科の1年次生へのアンケートには“普段の授業では学べない事を学べて楽しかった”“子どもが造形しているところを初めて見て、参加してよかった”“高校生と関わる機会が大学生になって無くなっていたのでこのイベントで高校生と関わることができよかった”“なかなか子どもたちと関わる機会がないので参加して良かったと思いました”などがあり、“幼稚園実習に対して不安を感じていたが、今年年長さんと触れ合って、考えが良い方向へ変わった”などの感想も聞くことが出来た。

活動後に行った担当の幼稚園教諭へのアンケートには、“普段場所見知り、人見知りが激しくて、違う場ですぐに遊び出すのが難しいと予想された子どもも、この時はすぐに遊び始め（中略）楽しんでた”“見ているだけの子どもがいなくて、全員楽しく遊ぶことが出来た”“遊びに迷う子がおらず、黙々と楽しんで取り組んでいた”などと書かれていることから園児達が主体的に活動に取り組んでいたことが再認識された。

このようなアンケートの結果から、三者協定の目的である“園児たちに、高校生、学

生、教員という世代の違う人たちがふれあい、効果的に教育を実施していく” ことについては達成できたと言える。

Ⅲ ワークショップにおける園児の表現過程について

表現過程の考察については、当日の記録および撮影した2台のビデオ映像と記録写真から行った。園児たちは造形活動ワークショップ開始の合図とともに、各自で好みのダンボールやクラフトテープなどを選び、各々が活動しやすい場所へ運んで行った。表現過程における初期段階は、園児が選んだダンボールの状態によって違うことがわかった。その違いを表現の特徴として捉えると、初期段階の表現過程の特徴は7種類のパターンに分類することができた。初期段階での7つのパターンをAからGとし、活動初期、活動中盤、活動終了前から表現過程を検証した。なお、表現過程が始まる準備として接着するためにダンボールを床に置いたりつなげたりする行為については、活動初期の表現過程に含まない事とした。なお、以下の各状態を表す写真記号は、(パターン名-パターン内での同一園児による活動)とする。図の空欄については、活動についての記録がなかったものとする。

パターンA ダンボールを立て円状にする (活動開始時に園児が選んだダンボールの形状：ダンボールの一辺をカットし開いた状態にしたもの)

活動初期 園児は、自分の周りを取り囲むようにダンボールを設置したり (A-1)、ダンボールを立てた際にできる緩やかなカーブを生かし円のような形を作った (A-2)。

活動中盤 園児は取り囲んだダンボールの中から出たり入ったりしながら、クラフトテープで補強していった。(A-1) (A-3) また、取り囲んだダンボールをクラフトテープで

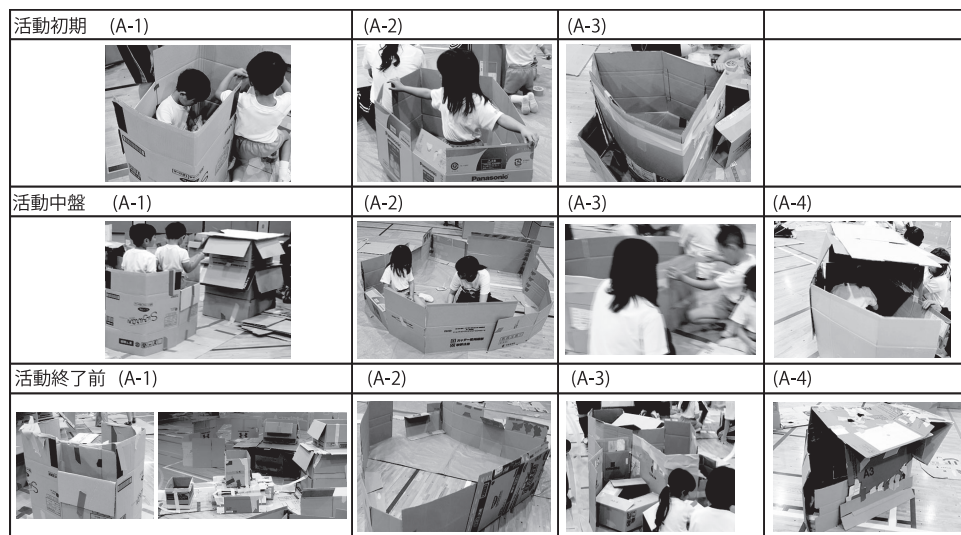


図3 パターンAでの園児の様子とダンボールの状態

ダンボールによる造形活動の実践からみた5歳児の表現過程についての考察

つなげながら、サイズを広げることに夢中になる園児や（A-2）円にしたダンボールの上に新たなダンボールを乗せ、屋根のようにする園児の姿が見られた（A-4）。

活動終了前 活動終了前になると形を整えながらダンボールにクラフトテープで装飾したり（A-1）（A-4）、活動場所の周辺にも装飾を施していった（A-1）（A-3）。

パターンAでは（A-2）のように円のサイズを黙々と広げていく園児が多かった。

パターンB ダンボールを立てクラフトテープにて接着する（活動開始時に園児が選んだダンボールの形状：ダンボールの一边をカットし開いた状態にしたもの）

活動初期 接着のため床においたダンボールのふちに沿って、開いた状態のダンボールを置き、それ自体が自立するようにクラフトテープを貼ったり、ダンボールを山のように折り接着した（B-1）（B-2）。高校生や学生は、園児がクラフトテープを貼る際にダンボールに手を添えるなどの援助を行っていた。

活動中盤 ダンボールで取り囲むような形状にしていく（B-1）（B-2）。

活動終了前 一部除いて全ての周辺を取り囲むようにダンボールを接着した（B-2）。

パターンBでは、最初に接着のため床においたダンボールによって形が決まっていくという特徴が見られた。

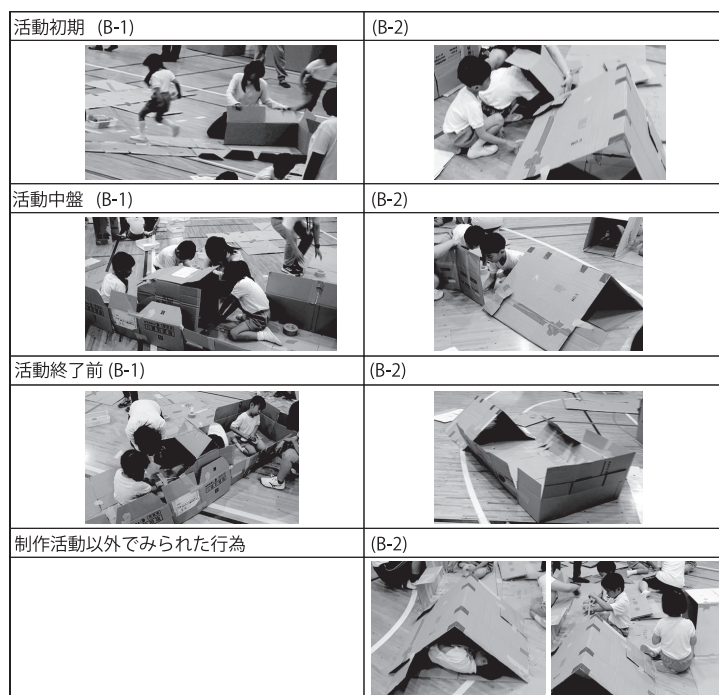


図4 パターンBでの園児の様子とダンボールの状態

制作活動以外で観察された行為

(B-2)に見られたように、自分たちが作った山の形にしたダンボールに入り込んで出て、再び入り込んで出るといった、作る行為とは別の行為が見られた。パターンBにおいて園児たちは“遊んでは作る”という行為を繰り返していた。

パターンC 箱ダンボールを積み重ねる（活動開始時に園児が選んだダンボールの形状：箱型のダンボール）パターンCの表現は会場全体において2箇所で見ることができた。ここで紹介する画像は全て同じ園児による表現である。

活動初期 園児は夢中でダンボールを積み重ねていった。大きなダンボールの上に畳んだダンボールを乗せると、今度は少し小さなサイズのダンボールをその上に乗せ、中に自分が入り揺らしたりして遊んだ。

活動中盤 揺らしたりして遊んだ後、その場に立てるかどうかを確認め板状に折ったダンボールを乗せることを試みていた。その後、近くで活動していた友達に声をかけ、自分もダンボールから降りて、二人で板状に折ったダンボールを上に乗せていた。

活動終了前 活動終了前でも活動初期や中盤と同じように、ダンボールを高く重ね、積み重ねた箱の中に入り立ったり揺らしたりしながら遊んでいた。それらの行為を時間いっぱい繰り返す姿が見られた。ダンボールを重ね、高くした箱の中に入ることによって周囲の園児の様子が見え、さらに不安定な足場なども、園児を夢中にさせていた。パターンCでは、ただ“作る”だけではなく、その最中に“遊ぶ”、という行為が表出し、その行為を繰り返す、という特徴が見られた。

パターンD 箱ダンボールを横に置き、つなげる（活動開始時に園児が選んだダンボール



図5 パターンCでの園児の様子とダンボールの状態

の形状：箱型のダンボール)

活動初期 園児たちは比較的大きなサイズの箱ダンボールを選び、それを横向きに置き、床面に敷いたダンボールにクラフトテープで固定し、カラークラフトテープで装飾したり (D-1)、箱ダンボールをつなげていった (D-2)。高校生や学生は園児が活動しやすいようにダンボールに手を添えるなどをしていった。

活動中盤 (D-1) のようにダンボールをつなげていく際に、園児たちはダンボールのフラップの部分折り、顔が出せるようにした。(D-2) の活動では、いくつもダンボールをつなげていた。2つのダンボールが合わさった箇所のフラップの部分を利用して、開閉できるようにしていた。

活動終了前 (D-1) はつなげたダンボールに、カラークラフトテープで色鮮やかに装飾していった。(D-2) は活動中盤で開けたフラップの部分に、ダンボールをつなげ制作物を大きくしていった。











活動初期 (D-1)	(D-2)	(D-3)
		
活動中盤 (D-1)	(D-2)	(D-3)
		
活動終了前 (D-1)	(D-2)	(D-3)
		
制作活動以外でみられた行為 (D-1)		
		
制作活動以外でみられた行為 (D-2)		
		

図6 パターンDでの園児の様子とダンボールの状態

制作活動以外で観察された行為 パターンDにおいてもダンボールをつなげ、装飾しながら“作る”行為と、ダンボールの中を四つん這いになってくぐったり、穴から顔を出したりして“遊ぶ”行為を繰り返していた。(D-3)については、箱ダンボールを使用しながら、カラークラフトテープによって装飾する行為が見られたので、パターンDと、Fが混合した表現となった。

パターンE ダンボールをつなげていく (活動開始時に園児が選んだダンボールの形状：ダンボールの一边をカットし開いた状態にしたもの)

活動初期 園児は開いたダンボールを選び、それをカラークラフトテープでつなげていく (E-2)。

活動中盤 男児と女児が特大サイズのダンボールを広げ、他のダンボールにクラフトテープでつなげていった (E-1)。初期に続きさらにダンボールをつないでいく (E-2)。(E-3)の活動については、(D-1)の活動から移行した姿が見られた。園児がクラフトテープを大胆に使い、開いたダンボールをつないでいった。

活動終了前 活動終了前になると、立体にしたり (E-1)、園児はダンボールをつないで、道のようにする行為に夢中になっていた (E-2)、(E-3)。

制作活動以外で観察された行為 パターンEにおいても“作る”と“遊ぶ”という行為が

活動初期	(E-2)		
		(D-1)にて活動していた女児が活動の中盤から、(E-3)の活動に移行した。	
活動中盤 (E-1)	(E-2)	(E-3)	
			
活動終了前 (E-1)	(E-2)	(E-3)	
			
制作活動以外でみられた行為 (E-1)	(E-2)	(E-3)	
			

図7 パターンEでの園児の様子とダンボールの状態

ダンボールによる造形活動の実践からみた5歳児の表現過程についての考察

みられた。(E-1)の男児は大きなダンボールにカラークラフトテープを貼っていた際、急に仰向けになり、鳥のように手足をパタパタと動かした。次に仰向けのまま膝を曲げたり伸ばしたりして大きなダンボールの上を背中ですつとつと滑りだした。声をかけると「ペンギンやで!」と教えてくれた。つとつと滑るダンボールを氷に見立てペンギンの動きを真似ていたようだ。男児は一通り遊んだ後は再び“作る”行為へと戻っていった。また(E-2)の男児もダンボールをつなげて道のようなものをつくり、その上を四つん這いになりはねていた。こちらはカエルだったようで、ダンボールで作った道からはみ出さないようにしながらびよびよんとはねて遊んでいた。

パターンF ダンボールをクラフトテープで装飾する (活動開始時に園児が選んだダンボールの形状:ダンボールの一辺をカットし開いた状態にしたもの)

活動初期 園児たちはダンボールを広げ、好きな色のカラークラフトテープを思いのままに貼っていった(F-1)(F-2)。

活動中盤 (F-1)の女児はカラークラフトテープを一色ずつ一定の幅になるまで丁寧に隙間なく貼っていった。一方(F-2)の男児はカラークラフトテープをランダムに隙間なく貼っていった。また絵や模様を描くようにカラークラフトテープ貼る姿も見られた(F-3)。

活動終了前 (F-1)の女児は6色のカラークラフトテープを貼り、信号機を作ったと教えてくれた。(F-2)の男児は裏面にも隙間なくカラークラフトテープを貼った。(F-3)についても、活動終了前にはカラークラフトテープを隙間なく貼り、色とりどりに装飾した。パターンFでの園児の表現の特徴は、ダンボールで形を作ることはせず、カ








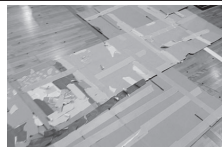
活動初期 (F-1)	(F-2)	
		
活動中盤 (F-1)	(F-2)	(F-3)
		
活動終了前 (F-1)	(F-2)	(F-3)
		

図8 パターンFでの園児の様子とダンボールの状態

ラークラフトテープでの装飾を目的とした所であった。

パターンG ダンボールを細かくカットする（活動開始時に園児が選んだダンボールの形状：箱型ダンボール、開いた状態のダンボール）

活動初期 ダンボールカッターで様々な大きさにカットする。活動中盤の（G-2）の女児の足元には細かくカットされた四角形のダンボールがあるため、活動初期には（G-1）の女児と同様にダンボールをカットしたと予測できる。

活動中期 （G-2）に見られるように、ダンボールカッターでカットした小さな四角や長方形のダンボールを組み立て装飾し、箱のような形を作っていた。

活動終了前 （G-3）クラフトテープを隙間なく貼り、より完成に向け箱のような形を作った。

ワークショップにおける園児の表現過程について考察すると、以下のようなことが明らかになった。表現活動の特徴として、パターンAからGのうち、AからEはダンボールを主とした活動であり、Fはカラークラフトテープを主とした活動となった。Gについては、ダンボールを細かくカットしたものを使用するという点において、他の活動との違いが見られた。

表現過程で多く見られた事柄としては、活動初期にはダンボールを主とした活動であったが、活動が進むにつれ、カラークラフトテープで装飾するといった、カラークラフトテープを主とした活動に変化したり、活動初期には近い距離で一人ひとり個々に制作を行っていた園児が、活動終了前になると二人で同じものを制作している、というような姿があった。

また、表現過程において、パターンB、C、D、Eの“制作活動以外でみられた行為”からは、“遊ぶ”行為が観察された。“遊び”の定義について、小川博久は“遊びの保育論”の中で、“幼児自らの動機で自らの活動をそれ自体の活動を楽しむために引き起こすこと”⁴⁾としている。“制作活動以外で観察された行為”において、パターンCの事例をあげると、園児たちは作るという活動に主体的に関わりながら、ダンボールを積み重ね、その上に乗ってはバランスをとるという行為を楽しみ、その行為をさらに楽しむために、ダンボールを一枚ずつ積み重ねては高くして乗るという行為を何度も行っていた。このように、園児自らが楽しむために、自主的に自らの動機によって様々な行為や活動を引き起こして行く姿は、“遊び”の定義にあてはまると言えるだろう。



図9 パターンGでの園児の様子とダンボールの状態

今回の三者協定造形活動ワークショップでは、“制作活動以外で観察された行為”において、“作る”行為だけではなく“遊ぶ”行為が見られ、この“作る”と“遊ぶ”という行為を繰り返し、繰り返しの中から、新たな行為や活動を追加し、また別の活動を生み出す姿が、大きな特徴であった。活動終了時、ほとんどの制作物が“行為の痕跡”や、“活動途中”のような状態であったのも、それらの制作物が“また別の活動を生み出す最中”であったからだろう。

Ⅳ 要約

幼稚園児、高校生、学生がともに参加する三者協定事業として、本学、幼児保育学科主催の造形活動ワークショップをおこない、その経緯、内容を紹介するとともに、ダンボールによる造形活動における5歳児の表現過程について観察をおこない、観察された結果について考察し、特徴をとらえた。

今回のダンボールによる造形活動の実践から、5歳児の表現過程の特徴として、ただ“作る”だけではなく、“作る”と“遊ぶ”という行為を繰り返すことがわかった。

また、“作る”と“遊ぶ”を繰り返した後、体育館に残された制作物は“作品”ではなく“行為の痕跡”や“活動途中”の状態であったことから、ダンボールとカラークラフトテープによる本造形活動は、最終的な完成形を待たない活動であり、“結果的に作品になることもあるが、始めから具体的な作品を作ることを目的としない”つまりは“作品にならないこともある”造形活動として、小学校教育要領図画工作にある「造形遊び」⁵⁾につながるプログラムであると捉えることができる。幼稚園教育要領の前文には、小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、と記載されているように、今回のダンボールによる造形活動は幼稚園教育要領においても有効であると考えられる。

今回のワークショップは人的、物的の両面において十分な条件のもとにおこなわれたが、今後、異なった条件のもとでも同様の試みをおこない、環境の規模に左右されない教育的なワークショッププログラムの開発、作成に活かしていく計画である。

謝辞

大阪国際大和田幼稚園の園児、大阪国際滝井高等学校の高校生、大阪国際大学短期大学部幼児保育学科の学生、三者協定造形ワークショップに携わった関係者のみなさまに感謝致します。

倫理的な配慮について：

大阪国際大和田幼稚園、大阪国際滝井高等学校では、様々な活動における論文発表や画像使用についての同意を保護者から得ている。個人名については名札に加工を施した。

参考文献

- 1) 学校法人大阪国際学園ホームページ <https://www.owada-k.oiu.ed.jp/agreement/>
- 2) 高原和子. 瀧信子. 矢野咲子. 青木理子. 小川鮎子. 小松恵理子. 幼児の豊かな身体表現の出

国際研究論叢

- 現－ダンボールの有用性－. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編19, 2018, 67-73.
- 3) 中坪史典. 上松由美子. 朴恩美. 山元隆春. 財満由美子. 林よしえ. 松本信吾. 落合さゆり. 遊びの質を高めるための保育者の援助に関する研究－幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの検討－. 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 38, 2010, 105-110.
 - 4) 小川博久. 遊び保育論. (株)萌文書林, 2010年.
 - 5) 文部科学省. 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編. 日本文教出版株式会社. (2018)